釈尊伝

竹村信治

欽明紀第十三年十月条によれば、我が国への仏教の伝来は、百済聖明王の「釈迦仏金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干巻」進献に始まる。釈迦仏ではなく阿弥陀仏だとする説（扶桑略記所引善光寺縁起）もあるが、一方、この仏教伝来のはじめを欽明七年とする元興寺伽藍縁起並流記資財帳は、聖明王が「太子像並灌仏具及説仏起書巻一篋」を贈ったとして、異伝を伝えている。灌仏会にかかわる諸具の貢献をいう記事とあいまって、「仏起を説ける書巻」と釈尊伝との関連が思われる。我が国に伝えられた釈尊伝の初例である。

「説仏起書巻」が何を指すのかは今わからないが、我が国に行われた釈尊伝の背景にある漢訳仏伝経典としては、過去現在因果経が知られている。奈良時代天平中期の制作を確かめうる絵因果経が平安時代にも伝写され、さらには中世に大和絵様式を整えた新絵因果経としても享受された事実は、因果経の、釈尊伝所依仏典としての位置を伝えていよう。直接間接の別は今おき、因果経の本邦釈尊伝への影響は、今昔物語集・清涼寺縁起・釈迦物語などに、明確に辿ることができる。

ただ、因果経の位置を認めるとしても、我が国の釈尊伝の形成が、そのすべてをこれに負っていると見るのは誤りである。たとえば、平安極初期の釈尊伝をつたえる東大寺諷誦文稿「釈迦本縁」（137行）記事に、冒頭「護命」の名（因果経「善慧」）、或は降魔の段における「目代鬼」報告の話題（因果経ナシ）のある点などは、直接ではないにしても仏本行集経とのかかわりを考えさせよう。釈尊前生の菩薩名を護明とする例は上に因果経の影響下にあるとした清涼寺縁起にも見出される。又、同じく室町期成立の滋賀・常楽寺蔵釈迦八相図には、託胎の姿が白象として描かれ（三国伝記一1「大象」。因果経には「菩薩乗六牙白象」とある）、釈迦出世本懐伝記では観閻浮提の報告者が金剛天子（仏本行集経「金団天子」、金沢文庫本仏教説話集同。因果経は菩薩自身の観察とする）とされるなど、仏本行集経の影は諸釈尊伝資料に遺されている。仏本行集経だけではない。たとえば、源氏物語桐壺巻・高麗人観相の条について、これを仏伝の阿私多仙占相を引いて説明する旧来の注

に対し阿夷（非仙人）説をもって異を唱えた林逸抄がその証左としてあげた仏説太子瑞応本起経や、釈迦出世本懐伝記等以降に見られる四園出遊に暗示を与えたとされる修行本起経なども、注目しておいてよい仏伝経典であろう。

ところで、このようにして、釈尊伝にかかわるいくつかの漢訳仏伝経典を指摘することができるが、では伝存する諸釈尊伝がそのいずれかを基として伝を形成したと考えてよいかというと、そうではない。なによりも、これらの仏伝経典の多くは釈尊の生涯の全体を覆っていなかった（仏所行讃・仏本行経・僧伽羅刹所集経の外は成道前後あるいは釈尊の母国訪問あたりまでの事跡をもって伝を構成する）。釈尊伝は、ふつうこれに仏の教化の話題である転法輪諸譚、仏の死を描く入涅槃の段を加えた形をとるから、いずれの仏典につくとしても、ここにまず転法輪・入涅槃を扱う仏典との合成が果たされなくてはならない。さらに又、遺された釈尊伝についてみるに、たとえば、歌謡類（沙弥戒導師教化・法成寺金堂教化・智証大師和讃・梁塵秘抄）を中心に見えはじめやがて中世以降の伝を覆う釈尊修行地檀特山説は、仏典には見えず、中国変文資料に拠ったものとされているし（覚禅抄―釈迦上・裏書―には「或云」として所見）、修行地雪山説（三国伝記一1、風雅和歌集二〇八五等）は、阿娑縛抄巻一九四に「（釈迦如来）成道記（道世造）云」として引かれていた。また、法華経・勧持品の記述が、釈尊養母摩訶波闍波提の名を憍曇弥として定着させたり、涌出品や寿量品が、その解釈をめぐる議論を介して、釈尊の生地に関する所伝にある影響を与え（摩竭陀国とするのは恐らくこれによる。梁塵秘抄219・三国伝記一1・太平記巻一八・釈迦八相物語など。なお、東大寺諷誦文稿389行・法華経第五巻開示抄第三・平家物語灌頂巻等参照）、釈尊の教化の年数や出家成道の年齢をいう場合の根拠になった点などは、周知のところであろう。そして、覚禅抄（釈迦上・下）に「或文云」「或云」として引かれる所説が諸釈尊伝の記事に符合する（太平記巻一八・清涼寺縁起の迦葉仏授記説、普通唱導集の兜率寿命四千歳説―「大論婆沙」説としても所掲―など）点は、諸論疏・抄物の介在をも推測させる。東大寺諷誦文稿の場合を例にとっても、この説教の場で語られたとおぼしい仏伝は、仏本行集経のみに拠っている訳ではなかった（護明菩薩の観閻浮提の段に同経には見られない内容をもち、二魔女の記事は因果経に基づく）。つまり、釈尊伝とは、ある仏典の祖述によってなったのではなく、諸種資料に伝えられた仏伝の合成添削再構成の営みをとおして、作られるものとしてあったと知るべきであろう。

一

＊

入・嬰・童・苦・成・降・転・滅（東大寺諷誦文稿338行）

入胎・受生・受楽・苦行・成道・転法輪・涅槃・分舎利（七大寺巡礼私記―薬師寺・東西両塔―）

入胎・嬰児―受生・童子―受欲・苦行・成道・降魔・転

法輪・入涅槃（覚禅抄―釈迦上・裏書・八相事・「或抄云〈出大般若経〉」）

これは、平安朝期の文献に見出される八相説である。四教義は、下天・託胎・出生・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃の各相を立て、大乗起信論は「生天・入胎・住胎・出胎・出家・成道・転法輪・涅槃」をいう。上掲の八相説は、下天（生天）の段をもたない点、受欲・苦行を立てる点、成道降魔の順序が逆である点、分舎利を八相に入れる点で、四教義・大乗起信論と異なる。しかしこの四点の内、成道降魔に関する点を除く（ただし、これについての問答が法華経第三巻開示抄第三に見える）三点は、栄華物語巻一七の法成寺御堂扉八相成道絵の構成説明や今昔物語集天竺部の仏伝に符合する。もちろん、これらが上の八相説に拠っているというのではない。栄華・今昔は、四教義・大乗起信論に見える出家の段、或はいずれの八相説にもない釈尊が忉利天に昇って摩耶夫人の為に説法した話題をも扱っている（東大寺諷誦文稿も同）。これによれば、平安朝期の釈尊伝とは、諸種八相説を背景に、諸仏伝話題の総合整理を企てながら形成されたものと見るべきだろう。

ただ、ここで注意しておいてよいのは、その総合整理が釈尊の生涯にかかわる話題の集成にとどまる傾向が強く、相互の連関性への指向が弱い点である。判断の材料に乏しい事情もあって明言はできないが、たとえば、諷誦文稿（164行）・栄華・今昔（二2）のいずれの釈尊伝においても見出される昇忉利天説法の話題は、後の釈尊伝の場合のように、発心・出家との関連性をもって取り上げられているわけではないし、阿私陀仙の占相話題をもたない今昔が巻一3に「阿私陀ノ云シニ違フ事无」と記すなども、釈尊出生前後の占相が伝記内で機能するものとして構想されていたかどうかを疑わせる材料となろう。昇忉利天の話題は、釈尊報恩の或は優塡王刻檀の話題として、日本霊異記（中39）・性霊集（77、103）・本朝文粋（巻一三、一四）その他に見出される。また、阿私陀仙は宝物集に占相者の代表としてその名が挙げられていた。これらは、釈尊伝にかかわる話題の個別的な享受を教えていよう。もちろん、吏部王記（承平元年九月三十日条、醍醐寺雑事記所引）にも伝えられるように、八相成道の全体が絵解きされこれを享受する場がなかったわけではないが、法華百座聞書抄の釈尊母国訪問・羅睺羅出家話題（三月七日条）に見るごとく、場に即してその一部が語られることも多かったはずである。そして物語は、ここで成長する。やや図式的にすぎるかもしれないが、かような個別の享受をとおして成長した話題が釈尊伝として集成される時、伝記内相互の連関性が稀薄になるのは、むしろ当然の帰結というべきだった。今昔においては、十九歳出家（一4）・六年苦行（一5、二2）・四十余年間転法輪（二2、三28）・八十歳入滅（三28）とある点に明らかなように、十九歳出家三十歳成道説と二十九歳出家三十五歳成道

説、さらには法華経涌出品四十余年説法説が同居している。栄華でも、一釈尊伝内ではないが、巻一七に十九歳出家をいい巻三〇では三十五歳成道をいう。これらも又、この間の事情を説明していよう。即ち、平安朝期の釈尊伝は、諸種仏伝資料を背景として個別に流布成長した仏伝話題を諸八相説の総合整理のもとに集成したもので、その営みに釈尊の生涯への興味や伝記再構成への意欲を窺うことはできるが、明確な枠組みや話題相互の連関をもつ伝の形成には到らなかったと判断される。

*

八年作嬰孩・七年作童子・四年学五明・十年受五欲・六年行苦行・三十五成道・四十五年中教化諸衆生

これに入涅槃を加えれば八相となるが、この説は、妙法蓮華経玄賛巻九末に「菩提留(流)支法師引経偈云」として見え、我が国でも金沢文庫本仏教説話集のほか覚禅抄(釈迦上・裏書)や法華経第五巻開示抄第三(「玄賛云」)に引かれる。私聚百因縁集は、これに変容を加えて次のように記している(一1)。

悉達七年作嬰児、八年作童子、四年学五明、十九出家、三十而成道〈癸未三月十五日〉、説法五十年而八十入涅槃〈癸酉〉

巻三24には原拠に近い説も伝えられているが、釈尊伝の記述を意識した本段にかくある点は、注意されてよい。これは、原拠の釈尊二十九歳出家三十五歳成道説を十九歳出家三十歳成道説に変えて用いているのである。曇鸞に観経を授けた流支三蔵の名は親鸞正信念仏偈(第75句)にも見え、浄土教を軸にした仏法史の体裁をとる百因縁集に引かれるにふさわしい所説であるが(なお、三国仏法伝通縁起巻上には「菩提留支云、成道五年説大般若云々」として、その名が見える)、その百因縁集にこのような変容を認めうるところに、十九歳出家三十歳成道説の定着ぶりが窺えよう。覚禅抄その他に見られるように、上の二説は唐土諸論疏に端を発する大問題で、そこではむしろ十九歳説の方が分が悪い。しかし、我が国においては、鎌倉期以降、これが用いられる。背景に天台五時教判の浸透(三宝絵中序にもみえるが、時代の釈尊伝を覆う程の定着ぶりを示すのは、鎌倉期から)を見るのは当然だが、ここに釈尊伝の枠組みは成立したのである。その中世以降の定着ぶりは、因果経とのかかわりをもつ清涼寺縁起がこれを採用しているところにも端的にあらわれている。

*

十九歳出家三十歳成道説の定着は、釈尊十二年苦行説の定着でもあった。十二年間苦行説は、妙法蓮華経玄賛巻九末に大智度論説を釈した「有解云」としてみえる(十九出家後五年事仙人行楽行、六年行苦行」。法華第五巻開示抄第三に所引。但し、二十九歳出家説が採られ、否定的見解が示される)ほか、伝

法正宗記（雪山修行説も所見）などでも採用され、決して我が国で始まったものではない。しかし、衆生済度の為の釈尊苦行を強調する姿勢は平安朝期以来のもの（上掲の平安期八相説は苦行相を立てていた）で、唐土説を受け入れる土壌は耕されていたといえよう。修行地を檀特山（須太拏太子の修行地）・雪山（雪山童子の住地）として釈尊苦行に前生苦行を重層させる場合が平安朝末期以降多く見受けられるのも、この間の事情を伝えている。

かくして定着した十二年苦行説は、釈尊伝における苦行話題重視の姿勢をもたらした。それは、仏伝話題の集成でしかなかった釈尊伝の、伝記としての成長を意味しよう。私聚百因縁集（二4）が、凡夫易行としての称名を説く為に過去現世を通じての釈尊の修行ぶりを強調する仏伝構成をとっているのは、その好例である。そこでは、釈尊苦行は衆生済度の為というより出離行としての色合いが濃いが、この釈尊苦行を強調する姿勢は、以後の釈尊伝に受け継がれ、そこに、釈尊前生苦行の説話である法華経提婆達多品の阿私仙奉仕譚（平家物語灌頂巻・法華経直談抄一本3・大原御幸・釈迦出世本懐記・熊野の本地・釈迦の本地あるいは常楽寺蔵釈迦八相図など）や雪山童子譚（釈迦八相物語）を組み込む形をもたらすことにもなったのである。

＊

百因縁集の釈尊伝は、釈尊苦行を重視しているところに、後代の釈尊伝に連なる鎌倉期釈尊伝のありようを指摘できるが、この後代の釈尊伝との関連という点で、十五世紀はじめに成立した三国伝記（一1）が四門出遊の話題を用いて七歳の「理ノ出家」を説いているのは、少なからず注目に値する（四門出遊を結婚の前とする仏典には太子瑞応本起経があるが、これは十四歳のこと）。七歳出家は伝記にも注するとおり梵網経の所説（覚禅抄―釈迦上・裏書―にも所引）だが、この説を採用し、そこに四門出遊の話題を排した点は、たとえば今昔との対比において、釈尊の出家に関するとらえ方の変容を伝えている。

今昔においては、具体的な発心の機縁となる事件は描かれていない。巻一3に「始メ物ノ心吉ク知給ザリケル時ヨリ夜ハ静ニ心ヲ鎮メテ思ヲ不乱シテ聖ノ道ヲ観ジ給ケリ」とあるごとく、託胎時の占相と響きあいつつ、当為の軌跡としての出家・成道への道を歩む太子が、四門出遊に出家の機縁を得るのである。それは、今昔にかぎらず、恐らくは平安朝の釈尊伝に共通のとらえ方である。これに対して、三国伝記は、四門出遊を発心の契機を語る事件として利用する。伝記には、発心の機縁が必要だったのである。そして出家は、以後の道心（厭世観）の深まりの結果として語られなければならなかった。ここに、釈尊伝を、発心の機縁を求め出家をこれに呼応するものとして構成するあり方は、成立する。

四門出遊をもって七歳の発心を語った例には、法華経直談抄（一本3、二末43）もあるが、一方、中世後半以降の釈尊伝の多くは、遊覧の間に実母の墓を見出す（鷹添壇蘗抄一六19・文句略大綱私見聞・釈迦八相物語）、鳥の雛を育てる様子を見て母なきことを怪しむ（釈迦出世本懐伝記・釈迦物語・釈迦の本地）と用いられる話題に異なりを見せるものの、実母の死を知ってその報恩の志に菩提心を発し、出家・苦行（悲母への報恩の為と明記）を経て成道の後切利天に昇って報恩の説法をなすといった展開をとる。それは、世間苦除断の為の出家から報恩の為の出家への変容を得つつ、中世前半期釈尊伝が切り拓いたこの伝記構成のあり方を承けたものといってよいであろう。

＊

以上、再構成されるものとしての釈尊伝との視点にたち、その展開を再構成のあり方の変容に辿ってみた。小論はそこに立ち入る余裕を持たなかったが、諸釈尊伝間に見出される依拠説の異相に一定の傾向を析出し、そこに再構成のあり方の展開を跡付けることもできるだろう。中世後半以降の釈尊伝には、注釈活動の盛行もあってか、清涼寺縁起・釈迦物語などに見るごとき仏典所説への回帰や異説の採用が目立つ。中世前半期に切り拓かれた伝記構成を変容させつつ継承する一方で、さらに新たな装いを求めて合成添削再構成の営みを繰り返す釈尊伝。近世釈尊伝は、この拡散した釈尊伝の統合を企てるところに構想され、逆に、主題を拡散させた読み物として成立する。釈迦八相物語は、その一例である。

〔たけむら・しんじ　金沢美術工芸大学講師〕

釈迦　仏教の開祖。釈迦牟尼とも言う。その出生は、凡そ紀元前五六六年頃（異説あり）で、インドの釈迦族の出身。ヒマラヤ南麓、迦毘羅城城主の浄飯王の長子、母は摩耶夫人である。はじめ悉達多と名付けられた。長じて十九歳（他説もある）の時、耶輸陀羅と結婚、長子羅睺羅をもうけるなど太子として恵まれた境遇にあった。

二十九歳の時、生老病死の四苦を救う目的で、秘かに宮殿より出て、二人の仙人について数年苦行を重ねたが悟りを得ず、ついにこれを捨て、仏陀伽耶の地、菩提樹の下で静坐禅定に入り、三十五歳で、成道（悟りを得ること）をなしとげた。

成道を得て、解脱の境を得た釈迦は、鹿野苑にて弟子の比丘たちに「初転法輪」を説き、苦楽を超えて中道を行なう事を教えた。ついで王舎城に入り、摩竭陀国の国王に説法し その帰依をうけるなど、爾後四十五年にわたり、インドガンジス河の中流地域、即ち祇園精舎や竹林精舎を中心に、法を説いて遊行した。

紀元前四八六年（異説あり）、八十歳の時、拘尸那揭羅の地にあって病に罹り、娑羅双樹の下を涅槃の処と定め入寂した。